

ニューズレター 第116号・2020年7月

日本カナダ学会 発行人：佐藤信行 編集人：福士 純・竹中豊・岡田健太郎

事務局：〒162-8473 東京都新宿区市谷本村町42-8 中央大学法科大学院 佐藤信行研究室 気付
TEL:080-3868-1941・FAX:03-6368-3646・http://www.jacs.jp・jacs@jacs.jp

(電話等の受付：毎週月曜日10時～12時及び13時～17時 郵便振替口座 00150-2-151600)

第45回年次研究大会のご案内

池上 岳彦

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、私たちの生活及び教育・研究活動は大きな影響を受けています。2020年9月12日(土)・13日(日)の2日間にわたって開催する第45回年次研究大会も、感染防止の観点から、大学セミナーハウス(東京都八王子市)を大会本部・会場としつつ、オンライン会議を併用する形で行います。もちろんこれは初めての試みですが、佐藤信行会長と矢頭典枝実行委員長を中心に、着実に準備を進めています。なお、会員は会場参加とオンライン参加のどちらを選択しても全プログラムに参加できます。

今大会では、キース・バンティング先生(Professor Keith Banting, Queen's University)に“Immigration, Multiculturalism and Social Integration”というテーマで基調講演をいただきます。バンティング先生には、移民・宗教等に起因する対立が激化する諸国と比較してカナダの社会統合がどのような特徴をもつか、という観点からお話しいたします。また、それに続くシンポジウム「分断を超えて——多文化主義・移民・社会統合」では「移民の安全保障化」「信教の自由」「多文化主義と間文化主義」に関する報告をもとに議論を行います。

ただし、バンティング先生が来日できないため、基調講演は、①予め録画した講演を1日目午後放映する、②講演に対する質疑応答を2日目朝、ライブ(オンライン会議)で行う、という方式で実施します。その後にシンポジウムへと進みます。

また、今大会では、新型コロナウイルス感染症の蔓延による「人の移動」制限が日本とカナダの交流に甚大な影響を及ぼしている実態及び対策について、教育・研究交流に焦点を当てる特別セッション“Human Mobility in the COVID-19 Era: Focusing on Education and Academic Cooperation”を、会場及びオンラインを通じた一般公開の形で開催します。具体的には、在日カナダ大使館から現状と方針について報告を受けて、学会員がコメント・議論を行います。このテーマには大学をはじめとする教育機関も大きな関心をもつと思われるので、会員の皆様からお声掛けくださるようお願い申

(次ページに続く)

JACS Newsletter No.116 (July 2020) // 本号の内容：第45回年次研究大会のご案内(池上岳彦) ● 自著を語る：『日系カナダ人の移動と運動 — 知られざる日本人の越境生活史 —』(和泉真澄) ● リレー連載：なぜカナダ研究をしているのか(第13回) 国境を越える業務に関わりながら(山田亨) ● 事務局より(第45回年次研究大会のお知らせ、「トラベル・グラント」募集について、『カナダ研究年報』第41号(2021年9月発行予定)の公募要項、会費納入について(お願い))・・・ ● 編集後記

し上げます。

さらに、今大会では、ICT (Information and Communication Technology)、環境とくに地球温暖化対策、及び自由論題のセッションも設けています。いずれもご期待ください。

では、皆様にはくれぐれも健康に留意されたいうえで、今回の年次研究大会にご参加いただけるよう、あらためてご案内申し上げます。

(第45回年次研究大会企画委員長・立教大学)

* * *

＜自著を語る＞

『日系カナダ人の移動と運動 ―知られざる日本人の越境生活史―』(小島遊書房、338頁、2020年、3400円＋税)

和泉 真澄

日系カナダ人の通史である本書は、英語と日本語の文献や資料を幅広く用いることと、トランスパシフィックな経済・労働の大きな構造とその中を移動した個人の体験との相関性を意識して執筆した。カナダでは日系二世ジャーナリストのケン・アダチがコミュニティからの依頼を受けて、1979年に英語で通史 *The Enemy that Never Was* (McClelland and Stewart) を出版しているが、アダチは日本語が読めなかったため、戦前の記述に関して不正確な部分や不足している情報が多く、また1970年代で記述が終わっている。これ以降、日系カナダ人については、第二次大戦中の強制収容に関連するトピックを中心に研究書や論文が数多く出されているが、19世紀末に始まった移住から21世紀の現在までの時代にわたって、移民政策・国際関係などのマクロなファクターから移住者やその子孫の個人の体験までを全般的にカバーした本は、日本語でも英語でもこれまでにはなかった。

筆者は1990年代半ばから日系カナダ人に関する研究を続けてきた。本書の出版までは独自の調査に基づいた特定テーマに関する論文(例えば、バンクーバーのパウエル街周辺に日系コミュニティが戦後に再生していった経緯など)、または先行研究を批判的に分析する

ことで新たな研究の枠組みを提供する論考(例えば、1907年バンクーバー暴動の新解釈、戦後のコミュニティ活動に活動家の越境が与えた影響の分析など)を業績として重ねてきた。通史の出版を決意するきっかけとなったのは、石井裕也監督による2014年の日本映画『バンクーバーの朝日』の公開であった。バンクーバー朝日とは、戦前のパウエル街(日本人街)で活躍した野球チームである。この映画公開の前後に、日本のテレビメディアがいくつかの日系カナダ人に関連する報道を行った。NHK番組「ファミリー・ヒストリー」が平幹二郎のカナダ生まれの母親を取り上げたり、朝日の映画のノベライズ版が出版されたりした際に、筆者のところにも取材があった。そこで必ず聞かれたのが「日系カナダ人の歴史全般が一冊でわかる一般読者向けの概説書はありませんか?」ということだった。その答えはノーであり、これは自分が書けないうまいということになったのだ。

日系カナダ人の通史が日本でもカナダでもこれまでなかったことには理由がある。一つは、戦前と戦後の歴史を一つの叙述にまとめる難しさである。19世紀末から始まった日本からカナダへの移住の歴史は、カナダに残っている日本語資料・日本語新聞を読む力だけでなく、当時の日本の状況、例えば、カナダへの移民の多くを生み出した滋賀や和歌山のコミュニティの事情に関する理解がなければならず、これは日本の移民研究者が得意とする分野である。一方、カナダのアカデミアで使われる批判的人種研究やポストコロニアル研究の枠組みは日本の研究者に必ずしも浸透しておらず、ジェンダー理論や人種化(racialization)理論、セトラコロニアリズムなどの概念を使ったブリティッシュ・コロンビア州の建設過程の読み直しや、戦後の日系人が沈黙とセルフ・ヘイトを乗り越えて、自らのヘリテージに対する誇りとコミュニティの歴史的記憶を再構築していった過程の分析は、文芸批評やジェンダー研究などの分野のカナダ人研究者が中心となって手がけてきた。この二つは、日本語と英語の違いだけでなく、問題

設定もベースとなる理論も研究手法も全く異なるため、ただ時系列的に並べても本にならない。

もう一つの問題は、第二次大戦中から戦後まもなくの国外追放から1970年代のコミュニティ復活までの時代の活動が、それまでの研究にはほとんどなかったことだ。この時期の活動については、筆者が院生時代に行っていた調査が役に立った。ブリティッシュ・コロンビア大学やアルバータ大学には日系人が編集した雑誌 *Asianadian* や *Rikka* (六華) などが所蔵されていたが、これらの雑誌は先行研究でほとんど取り上げられていなかった。留学時代にバンクーバー、トロント、エドモントン、ウィニペグなどで、日系だけでなく中国系カナダ人の活動家などにもインタビューをして回った。トマス・ショーヤマ、ゴードン・ヒラバヤシ、ロジャー・オバタ、ミッチ・アユカワ、ジョイ・コガワなどの戦争体験者、1970年代にパウエル祭を開始したリック・シオミ、マユミ・タカサキ、タミオ・ワカヤマ、ジム・ウオン・チューなどのコミュニティ活動家、リドレス運動に関わったアート・ミキ、ゴードン・カドタラコミュニティのリーダーたち、そしてリンダ・ウエハラ・ホフマン、ジェイ・ヒラバヤシ、ジョン・エンドウ・グリーナウェイらコミュニティ・アーティストの話聞くうちに、先行研究でしばしば指摘されていた「日系カナダ人は静かでおとなしい」というステレオタイプはどんどん崩れていった。この時の研究が本書を他の誰にも書けない日系カナダ人史にしているという自負はある。

さらに通史を難しくしていたのは、ディシプリンに関する問題だ。日本からの移住とカナダへの定住の経緯については地理学、歴史学研究の蓄積があり、カナダで遭遇した人種差別や強制収容政策については政治史や法学研究、コミュニティの変遷やエスニック・アイデンティティについては社会学、移民した個人の体験の再現や分析は文学やエスノグラフィが有効である。これらをまとめて一つの本にするとすれば、学際性を持ちつつもそれなりの叙述の一貫性は必要である。

日本と北米を往復しつつ研究者としてキャリア

を築く中で、アジア系アメリカ人・カナダ人研究がトランスナショナル・ターンを迎えたことはありがたかった。従来の移住研究とエスニック研究を統合し、多様な学問分野や方法論で書かれた研究を一つの歴史的叙述にまとめる枠組みを作る大きなヒントになったのだ。本書をまとめる概念として、「移動」と「運動」の意味を掛け持つ「Movement」をキーワードとすることを思いついた。戦前期の章は大部分が先行研究に依拠しているが、セトラーコロニアリズムや越境的転回などの概念を用い、カナダ西部社会の構築過程の中に日本からの移民の流入を位置付けた。これらの章では、排日運動のカナダ的特徴、女性の役割、移民の出身地と移住先の職業との関係などを説明しつつ、太平洋の両側を見ながら移民たちが戦略的に自分の生活圏を築いていったプロセスを描いた。第二次世界大戦以降の章は、強制移動と収容、1950年代、60年代の日系人の生活再建と活動、1977年のパウエル街の再生、そしてリドレス運動とそのより大きな成果としての戦時措置法撤廃と緊急事態法の制定過程を説明した。最後の章では再び太平洋をまたぎ、バンクーバー朝日の歴史の掘り起こしが、現在の日本とカナダの間で移民の子孫たちをつなぐ役割を果たしたことを明らかにしている。日系人の活動／運動に関する記述については、カナダ社会が「白人男性の帝国」から多文化主義社会に変わっていった時代の変化を単に反映した動きとしてではなく、その変化を引っ張り、多文化主義の真の意味を世に問うた運動として分析し、その能動性を明らかにした。また、調査に協力してくれた日系人たちの姿が生き生きと見えるように、各章の冒頭は個人の人生の記述から始めている。本書の読者が日系カナダ人のこれまでの歩みを知るだけでなく、カナダの歴史と触れ合うなかで、市民の運動や葛藤を通じて多様性を認める社会が構築されていった過程についても考える一助となれば嬉しく思う。

* * *

(同志社大学)

<リレー連載>

なぜカナダ研究をしているのか（第13回） 国境を越える業務に関わりながら

山田 亨

私が自分自身のことをカナダ研究者と呼んでいるのか、かなり躊躇しますが、今回は、主にカナダとの関わりが強い私自身の業務的な側面と、現在に至るまでの背景と絡めながら徒然と書かせていただけたらと思います。

これまで、勤務校で教務と研究に携わることと並行して、学生の留学・受入れのアレンジを含めた国際交流の運営を業務の主軸として私は取組んできています。研究者である大学教員の場合、社会還元の方法は研究発表や学生指導が一般的と思いますが、私の場合、幸いにも留学指導・留学生の受け入れをはじめとした業務を通じた社会還元という選択肢を与えられてきました。その業務の中で、これまでの私自身のカナダでの留学・滞在経験が常に貴重な下地となっていることをとみに感じております。

私がカナダに初めて長く滞在したのは学部時代で、1997年の夏から約1年間、バンクーバーに留学したときでした。学部時代の大学の留学先の選択肢であったことが理由でもありましたが、もともとのおっかけは本学会の会員でもある私の母の調査地であったことで地元を知り合いが多くいたことが何よりの理由だったと思います。バンクーバーであったこと、そして、ちょうど香港が中国に返還された直後であったこともあり、岡田健太郎会員（2018年12月の『ニューズレター』111号）のご留学当時と状況が似ていると思うのですが、大学でも、街中でも、香港系や台湾系、韓国系、そして、インド系やパキスタン系、そして、先住民など、日本やアメリカとは違うポストコロナ環境で生活し学ぶことができましたし、当時の留学中にできた友人関係は、現在も私自身のかげがえのないものとして続いています。

このような体験は、おそらくカナダに関わる皆様は、多少違いがあるにしろ体験されてきたこと

かと思います。そして、カナダが国として有する複雑さや魅力に惹かれ、皆様もカナダに関わる業務や研究に関わられてきていらっしゃるかと思います。私もそれにもれず、日本に帰国後、修士課程でカナダ研究を有する大学院で幸いにも学ばせていただくことができました。

しかし、私の場合、修士課程修了後に日本を離れますと、再度帰国してくるまで博士課程および最初の職務の関係でアメリカにおりました。そうではありましたが、アメリカにいても、気がつけばカナダとの関係性は研究・業務・生活に至る多方面に及び、結局のところ切れないものになっていました。私は人類学・法社会学を専門としておりますが、この2つの分野ではカナダとアメリカの間で垣根はほとんどありません。おそらく他の学術分野も同じと思われるのですが、むしろ、調査や研究交流の両面において2国では頻繁な往来があります。フランス語で著作や論文を読むことができ、そして、議論にも参加できる研究者が多いケベックをはじめとしたカナダ人の研究者の方が、アメリカの研究者よりも2周回ぐらい先に行っているような印象を受けるのも事実ですが、アメリカ人にとってはそんなことはある意味お構いなしで、カナダはただ北にあるぼんやりとした地域という印象であるのが残念なところですが、しかし、通常アメリカで開催されている学会が、カナダでの開催となると、応募者・参加者が激増し、会場がギューウギューウになるのも楽しい光景でもあります。カナダに対してはぼんやりとしたイメージを持っているのに、モントリールやバンクーバーをはじめとした具体的な地名が出ると「学会」という「公務」を理由に出張申請する人が増えるのを目の当たりにすると、まるで現実になってしまった落語の小噺の世界に自分が置かれているような感じになります。

大学院修了後の最初の仕事はニューヨークの片田舎のロースクールの研究員の業務でしたが、勤務地はオンタリオ州との国境地域であるサウザンド・アイランドから車で2時間近く南に

位置したところでした。そのため、業務・研究・休暇の多岐にわたり越境してオンタリオ州とケベック州を行き来していました。この地域の国境を越える往来は本当に頻繁で、学術でも私生活でも多くの刺激を受けることになりました。

当時の経験は、現在の勤務校での業務である国際交流の基礎にもなっており、カナダ・アメリカとの大学での研究・教育交流の調整の際には、1回の訪問で飛行機で2国間を複数回移動することもあります。また、ニューヨーク到着後には空港から車を運転して、アメリカ側の複数の大学を訪問し、そのまま、国境を越えて、オンタリオとケベックの大学を訪問し日本に帰国する、ということもありますし、学生や院生と一緒に2国間のイクスカーションをすることもあります。この地域は、歴史や言語の多様性だけでなく、2国間関係や先住民の現状などを学習するための社会科学的なフィールド演習にうってつけです。しかし、現在のCOVID-19の世界的な拡散の流れ（主にアメリカでの感染の拡大）の中で、いつ国境封鎖が解除されるのか見えないのが残念なところです。

また、これまでの高等教育の国際化の流れの中で、カナダはその治安の良さのイメージから人気の留学先という地位を維持し続けていますが、教務指導や研究指導からの視点では、その良好な治安のイメージに加え、カナダが有するイギリスとフランスの両方の旧植民地との学術的議論やネットワークに学生が身を置くことができることはかなりの魅力です。このことは、一般的な日本の高校を卒業してきた大学生にはあまりなじみのないことで、英語圏に関心がある学生の多くがアメリカやイギリス、そして、カナダやオーストラリア、ニュージーランドといった地域に目が行くのにに対して、フランス語に関心のある一般的な日本の大学生は、どうしてもフランスにばかり目が行ってしまい、今でもカナダはぼんやりとした国みたいです。一般的なフランス語選択の日本の大学生にとってはカナダやケベックといっても、「へエ〜？」というような反応をされることが

あります。しかし、アフリカや中近東、そして、東南アジアなどに関心があるものの、そのような地域の大学との協定校がなかったり、先進国以外の地域への留学に対して家族が難色を示している場合などに、モントリオールなどへの留学を勧めることがあります。そのような学生がカナダに留学し、帰国してくると、それぞれの留学経験を基礎にした地域を越える知識やネットワークが学生たちのその後の進学や業務における下地になることもよくあります。同時に、学生からは「先生、アメリカとかフランスとかにいった学生と比較して、自分の場合、なんか英語もフランス語も、中途半端になって帰ってきた感じがするんですね」というようなコメントを聞くこともあります。そのようなときは「大丈夫だ。そう思える感覚を得られたこと自体が強みだ」と、アドバイスになっているのか、なっていないのか、わからない返答を学生に帰してしまっております。

なにかとめがなくなりましたが、このように、私の場合、カナダとの関係は、地域研究的な側面よりも、専門分野での研究では空気のように不可欠なものとなっています。また、留学指導という教育を通じて、自分自身のカナダでの留学や業務経験を社会還元できる役割にいられることにも感謝しています。今後とも、研究・教育の両面を通して、何かしらのかたちで社会還元を続けていけたら、と思っております。

(明治大学)

* * *

((事務局より))

◆第45回年次研究大会のお知らせ

2020年9月12日(土)・13日(日)、大学セミナーハウス(東京都八王子市)を大会本部・会場としつつ、新型コロナウイルスの感染防止の観点から、**オンライン会議**を併用する形にて、**第45回年次研究大会**が開催されます。プログラム・報告要旨集は、当学会ホームページ内に発表しています。

◆「トラベル・グラント」募集について

2020年度(2020年4月1日～2021年3月31

日)までの間に、カナダおよびカナダ以外の国(日本を除く)で開催される国際会議などでカナダ研究について報告をする本学会会員に旅費一部補助の制度です。本学会会員によるカナダ研究の成果を広く海外に発信し、研究の交流や国際化を図るのが目的です。ただし、トラベル・グラントは旅費の一部を補助するのが趣旨ですので、旅費のすべてをカバーするものではありません。募集要項は次のとおりです。(1)支給人数と支給金額:1名につき5万円・最大2名。(2)支給対象者:募集時点において日本カナダ学会会員であること。原則として、専任の勤務先を持たない会員。専任の勤務先を持つ会員でも応募出来ますが、優先度は低くなります。(3)応募書類:①本学会所定の応募用紙(日本カナダ学会のホームページに掲載)、②国際会議などでの報告が正式に受け入れられたという文書(メールも可)、③出張に関する費用(航空運賃、滞在費、参加登録料など)の見積書。(4)出張後の義務:①帰国後2週間以内に報告した論文を、郵送にて学会事務局に提出すること。②出張に関わる費用の報告書(学会ホームページ掲載の所定の書式)。(5)その他の事項:①当該年度内でトラベル・グラントの予算額(10万円)が満額執行されなかった場合でも、原則として、残額を次年度への繰越は行いません。②出張期間は当該年度内に終了しなければなりません。③このグラントを支給された会員は、原則として再度応募することはできません。(6)審査方法:日本カナダ学会理事会における審査機関(対外交流・社会連携委員会)により事前審査を行い、それぞれ5月および9月の理事会にて最終決定します。(7)応募締切日:2020年4月末日(締切済み)および同年8月末日(年2回)。(8)提出先:〒162-8473 東京都新宿区市谷本村町42-8 中央大学市ヶ谷キャンパス佐藤信行研究室気付 日本カナダ学会事務局宛。(9)問い合わせ:電子メールにて事務局まで。

◆『カナダ研究年報』第41号(2021年9月発行予定)の公募要項

(1)未発表の完全原稿のみ(採否の決定はレフリー制による)。(2)原稿の種類:「論文」(邦文40字×40行×12.5枚相当以内;英仏文16語×25行×20枚相当以内);「研究ノート」(邦文40字×40行×8枚相当以内;英仏文16語×25行×12.5枚相当以内);「書評」(邦文4500~5000字)いずれも横書き、図表、注、文献リストを含む。(3)締切:2021年1月末日必着。(4)執筆要項及び投稿用表紙:JACS ホームページに掲載。(5)原稿送付先:〒277-8687 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1 麗澤大学 田中俊弘宛(郵送)、あわせて ttanaka@reitaku-u.ac.jp (メール添付)まで。

◆会費納入について(お願い)

現在会費の納入を受け付けております。また、前年度までの会費を未納の方は、直ちに納入下さい。過去3年分(当該年度を含まず)の会費が未納の場合、学会からの発送物停止等をもって会員資格を失うこととなりますのでご注意ください。一般会員:7,000円・学生会員:3,000円(学生会員は、当該年度の学生証のコピーを提出のこと)。郵便振替口座:00150-2-151600。加入者名:日本カナダ学会。他金融機関からの振込の場合は、口座番号:ゆうちょ銀行〇一九(ゼロイチキョウ)店 当座0151600 ニホンカナダガツカイ。来年度以降、自動振替に移行希望の方は事務局までご連絡ください。必要書類をお送りします(自動振替による口座引落は7月です)。ご協力願います。なお会員区分の変更のある場合は直ちに事務局までお知らせ下さい。

* * *

★編集後記……今号から編集担当の一員になりました。が、今号はこれまでの編集担当のみなさまのテキパキとした編集作業をただただ見ているだけの透明人間となってしまいました。月号楽しく読んできたニューズレターを、今度は編集する側からということで、できるだけ早く実際の編集を任せていただけるようにと思っています。これからよろしくお願いたします(0)